

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2021. 1
第 99 号

野上陳令日記

～複数の資料で事実を確認する面白さ～

野上陳令（国佐一七七四～一八四六）は九代藩主佐竹義和の藩政改革下で頭角を現した改革派官僚です。その日記が当館には多数残されており、奉行職を中心とした藩政に関わるものや藩校明德館における教学関係など、当時を知る手がかりが豊富です。一つの資料によって、過去の出来事が現在に伝わるだけでも刺激的ですが、複数の資料を用いてその事実が二重三重に色合いを深めていく過程は歴史に興味を持つものに

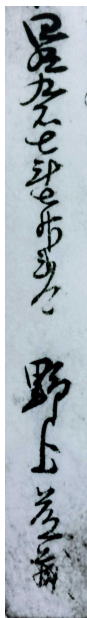


『御国目付下向之節指出候御城下絵図』
久保田城からは南に約2kmの距離にある

あけましておめでとうございます。二〇二一年は
廃藩置県から一五〇周年の年になります。
今年もよろしく願っています。



とっては楽しいものです。「御国目付下向之節指出候御城下絵図」（県C一七九）は文政期に幕府に提出した絵図の控ですが、その城周辺には当時の藩士の居住地が書き込まれています。改革派官僚とされた藩校出身者である介川東馬・金易右衛門の名も野上陳令と共に見つけることができます。野上陳令（東蔵とも称す）宅は中心地を離れた場所にあり、また藩の職員録（文化期）に当たる「久保田分限帳」（混二五・一〇六）からは給与が米高にして五十石にも満たないことが分かります。自宅位置や給与からも『実力』

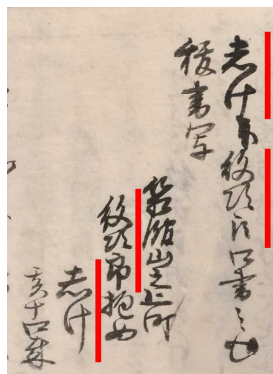


〈四拾九石七斗七升貳合 野上藤蔵（東蔵）〉

のみで藩政の中核に食い込んだ人物だと想像できます。なお、この絵図は秋田市が提供する「あきたおさんぽマップ」のアプリで現在の秋田駅西口周辺の地図と重ね合わせて活用できます。時代をまたぐ地図の重なりは想像力を掻き立てます（QRコード参照）のでお試しください。

また、「能代方御用留」（混架二五・一七）は野上陳令の能代奉行副役（補佐役）から奉行としての日記ですが、その中に文化十二年の記事として、幕府勘定奉行から届いた文書が引用されています。詳細は省きますが、能代から函館（当

時は箱館）の茶屋へ酌取女として、同じく能代出身の「紋次郎」の世話で奉公に出た「志け（しげ）」という十四歳の少女が着いて間もない内に起こした、市中への放火事件についての人物照会です。当時の函館は松前奉行の管理下にあり、



『能代方御用留』

幕府直轄であつたため重大な事件については奉行が老中に判断を仰ぎました。

そのような事件の裁決を幕府がまとめ、判例集として分類したものが『御仕置例類集』です。江戸幕府滅亡時に寺社奉行から明治政府に引き渡され、現在は国立国会図書館に保存されています。この資料にある能代生まれの少女を取巻く環境、当時の社会情勢などが当館所蔵資料と重なります。（義和の一代記「御亀鑑」江府七十九（AS二八九・一八・七九）にも記載あり）
複数の資料によって、一つの事実が確定されていく過程に触れることは、後世に生きる者にとっては当時の人々の生き様を身近に、また鮮明に感じることができる貴重な体験となります。
野上陳令が残した大量の日記は、まだ刊行はされてはいませんが、当館閲覧室で写真本を自由に閲覧することができます。どうぞご利用ください。古文書からも、今と何ら変わらない生身の人間の息づかいや人間模様を感じることにも少なくありません。

【高田環樹】

東照大権現、駿府に死す

『義宣家譜』から

元和元年（一六一六）三月、前年に大坂城の豊臣氏を滅ぼして後顧の憂いを絶った徳川家康は駿府城で危篤に陥りました。一説には鯛の天ぷらにあたったともいわれています。

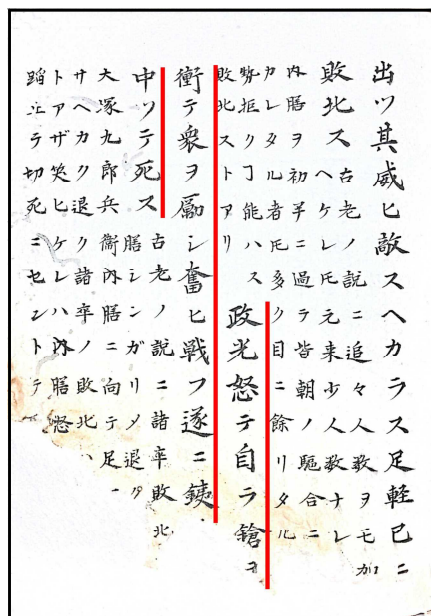
佐竹義宣は前年の大坂の陣後、秋田に在城しており、二月一八日に秋田を發し、同二八日江戸に至り、そこで家康の不例の話を聞き、駿府へ向かいます。

三月五日、駿府城本丸へ登營し家康に拝謁しました。これが家康との最後の対面となりましたが、この時の家康の言葉が「義宣家譜」に次のように残されています。

「去々年大坂堤に於て自身手を碎き御辛勞、今に御礼申さず候。病中も忘れ申さず候。將軍江も委く申渡し候間、如にあるまじく候。又去年も遠国より急ぎ登候処、両条共に少も失念申さず」

実はこの記述は当館所蔵本の「義宣家譜」（六巻本）にはなく、東大史料編纂所本（一二巻本、写）を元にした『佐竹家譜』（原武男校訂、東洋書院）に拠りました。「去々年大坂堤」の辛勞とは、大坂冬の陣の今福での戦闘のことです。この戦いで渋江政光が戦死しました。その箇所を当館史料（AS二八八・八四「義宣家譜 四」）

から見てみます。（慶長一九年二月二六日条）



「朝義宣渋江政光ヲシテ今（福出張ノ）敵ヲ追払ハシム（中略）義宣自ラ馬ヲ半途ニ出シテコレヲ指揮ス（中略）未ノ刻許ニ大坂城兵三千許鉄炮ヲ放チ鎗ヲ振テ衝キ出ツ、其威ヒ敵スヘカラス足輕已ニ敗北ス、政光怒テ自ラ鎗ヲ衝テ衆ヲ勵シ奮ヒ戦フ、遂ニ鉄（炮ニ）中ツテ死ス」

家康はこの功を「病中も忘れず失念もしない」と言ったのでした。義宣は名家老・渋江政光の死によって家康への忠誠を天下に示しました。家康と最後の対面をした後、三月一七日に暇を賜い、家老の梅津政景を駿府に残し、義宣は江戸に戻りました。四月二日に「大相国不例危急」、四日に「大相国御不危急」と続き、一日に「大相国昨日薨去の由」にて政景が江戸に帰参していますが、これは間違いらしく、一九日の記事に次のようにあります。

「大相国去十七日午刻薨去、大明神と諡して亥刻駿河国久能の御城中に御宮移の由今日江戸に告ぐ」

死後に家康は久能山の山頂に葬られ、東照大権現として祀られて神となりました。死に際して最後まで懸念していた薩摩と長州に備えるため西に向かつて埋めるよう指示したとされ、久能山の東照宮は現在も階段を何百段も登った険しい山中に西に向かつて建てられています。

そして、その予言は二五〇年後に見事に的中し、東海道を下った官軍が駿府を通って江戸へ向かいます。江戸を明け渡した最後の將軍・徳川慶喜は、家康の最後の地であった駿府で過ごすこととなり、新たに徳川宗家の当主となった徳川亀之助（家達）が駿府城に入りました。駿府城は現在も天守の発掘作業が続いており、三代代にわたる居城跡が出てきています。駿府城は、家康と家達の居城として、江戸時代の幕開けと幕引きの役割を担ったのでした。

家康の死の直前に江戸に戻った義宣は、一七年後の寛永一〇年（一六三三）一月二五日江戸で逝去しました。遺骸は秋田に運ばれ天徳寺で政景が一人勤番しました。その政景も三月一〇日にわかになりました。三月二九日に義宣の葬礼が行われ、その記事で「義宣家譜」は閉じられています。こうして家康の死に際し駿府へ赴いた二人も秋田藩の礎を築いた後、同じようにこの世を去ったのでした。

【佐藤 隆】